

I. はじめに

情報構造を統語的に明示した構文の一つと言える疑似分裂文は、「what B is/was A」の型をとる。Bには前提が、Aには焦点が充てられる。焦点 Aの位置には名詞句(動名詞も含む)、不定詞、*that*節など様々な要素を置くことができる。¹⁾ 本稿では特に焦点つまり補語の位置に不定詞が来る疑似分裂文を扱う。

(1) a. What he wants is to pay the money.

b. What he wants to do is (to) pay the money.

Jespersen(1940)、安藤(1969)、Visser(1972)、Kuno(1977)、安井(1978)、Quirk(1985)において既に意見の一致が見られるのだが、上例(1) a.のように主語節の中に *do* をもたない疑似分裂文の場合、*to*不定詞だけをとり原形不定詞はとれない。しかし、(1) b.のように主語節の中に *do* をもつ疑似分裂文の場合、*to*不定詞、原形不定詞のどちらをも焦点の位置に置くことができる。つまり、原形不定詞をとるには主語節の中の *do* item²⁾ の存在が必要条件である。このような主語節が *do* item を含む疑似分裂文の場合、一見恣意的に *to*不定詞と原形不定詞が選択されているように思えるが、何らかの要因が介在していると考えられる。本稿では、先ず *to*不定詞と原形不定詞の選択に関する先行研究を通覧する。更に、実例調査とインフォーマント調査に基づいて *to* の出沒を支配する要因について包括的に考察する。

II. 先行研究

石橋_三は、疑似分裂文において *to*不定詞が出現する例として、次の(2)を挙げて、「ここで *to* が用いられている理由には、主語と補語の位置の離れていることもあると推測されます。」と説明している。つまり、統語関係をより明確にするために *to* が出現するというのである。

(2) "The first thing I want you to do, Handsome Brown," Ma said angrily, "is to tell me what on earth you meant by bringing those goats here."

石橋_三(1961:57)

安藤は(3)の例を挙げ、「*to* のない形は概して感情的色彩を帯びた言い方で、ためにいっそう口語的・強意的であり、一方、*to* のある形はややformalで冷静な判断を下すような場合に用いられることが多い、と言えるように思われる。」と説明して、*to*不定詞と原形不定詞の表す意味的相違を指摘している。

(3) All I could do was wait.

安藤(1969:13)

Kunoは、*to* の出沒を支配する要因についてより詳細な観察を示している。彼のcopulaは *was*, *will be*, *might be*, *has been* に変えた場合の判断は、次の通りである。

(4)① a. What John did was kiss monkeys.

b. *What John did was to kiss monkeys.

- ② a. What John will do will be kiss monkeys.
 b. What John will do will be to kiss monkeys.
- ③ a. What John will do might be kiss monkeys.
 b. What John will do might be to kiss monkeys.
- ④ a. ?*What John has always liked to do has been kiss monkeys.
 b. What John has always liked to do has been to kiss monkeys.

Kuno(1977:94)

Kunoによれば、上例の①の場合、a. は容認されるが b. は ungrammatical である。②と③の場合は、それぞれ a. b. とも容認される。④のように *been* のあとでは、*to* は obligatorily に出現すると述べ、④ a. の場合、ungrammatical あるいはせいぜい marginal という判断を示している。

大江は、(5)の原形不定詞の例を、「主語に *do* の原形不定詞が現われており、それとの平行性からしても原形不定詞が来やすいであろう。」と説明する。彼は主語とのパラレリズムを出没の要因として挙げているのである。

(5) ...the most the linguist can do is impose some order,...

大江(1983:153-155)

Quirk et al. は、(6)の二例を挙げ、*to* は optionally に現われるとのみ記述している。Leech(1989)、Declerck(1991)においてもほぼ同様の判断である。

(6) What they must do is (to) propose an amendment to the resolution.

The thing you should do is (to) show them your diploma.

Quirk et al. (1985:1067)

以上の先行研究を見る限り、包括的に *to* の出没の要因を考察したものはなく、限られた側面からの観察に終わっているように思える。そこで *to* の出没を支配する要因をできる限り包括的に考察せんがため、実例調査とインフォーマント調査を行なった。

III. 実例調査

実例調査は、*to*不定詞と原形不定詞の選択に国籍差があるのか、又、地の文と会話文というスタイルの違いが、*to* の出現に影響を与えるのかどうかを確認する目的で行なった。調査対象とした疑似分裂文は、基本形 what+S...do+be+不定詞 と出現頻度の非常に高い all +S...do+be+不定詞 である。調査に用いたコーパスは英米の雑誌と大衆小説である。イギリス雑誌は *The Listener*、アメリカ雑誌は *Newsweek* を選び、それぞれとも1987年度分と1989年度分の発行月日に偏りがないように選ばれた13冊ずつ計26冊から、大衆小説は英米とも17冊ずつ選び、その中から用例蒐集を行なった。その結果が表1である。

<調査結果>

*what*で始まる疑似分裂文の場合、イギリス英語では *to*不定詞 15例(60%)、原形不定詞 10例(40)%であるのに対して、アメリカ英語では *to*不定詞 3例(15%)、原形不定詞 17例(85%)と、イギリス英語では *to*不定詞の比率が高いが、アメリカ英語では原形不定詞の方がはるかに高い。これは、*to*不定詞と原形不定詞の出現率に英米差があることをはっきり示している。一方、*all*で始まる疑似分裂文の場合、イギリス英語、アメリカ英語とも原形不定詞の出現率が高く、国籍差は見られない。

表1

Type Corpus	地の文		会話文	
	a) What+S...do+be+to~	b) What+S...do+be+原形	c) What+S...do+be+to~	d) What+S...do+be+原形
Listener	10	7	2	3
英小説	1	0	2	0
Newsweek	1	3	1	7
米小説	0	0	1	7
合計(%)	12(54.5%)	10(45.5%)	6(26.1%)	17(73.9%)
Type Corpus	e) All+S...do+be+to~	f) All+S...do+be+原形	g) All+S...do+be+to~	h) All+S...do+be+原形
Listener	1	29	0	1
英小説	4	4	5	5
Newsweek	1	4	1	2
米小説	6	28	2	28
合計(%)	12(15.6%)	65(84.4%)	8(18.2%)	36(81.8%)

次に、地の文、会話文というスタイルの違いが *to* の出現に影響を与えているかどうかを見ると、*what* で始まる疑似分裂文の場合、*The Listener* では、地の文は *to* 不定詞の頻度の方が高いが、会話文では原形不定詞の方が高くスタイル差が見られる。しかし、*all* で始まる疑似分裂文の場合は、スタイル差を英米とも観察できない。

実例調査では、国籍差、スタイル差といった外的要因が *to* の出沒に關与することを確認することができたが、内的要因、つまり形態的、統語的、意味的要因については確認できなかった。それで、内的要因が *to* の出沒に与える影響を観察するためインフォーマント調査を行なった。

IV. インフォーマント調査

疑似分裂文における不定詞の *to* の出沒に内的要因が關与しているかどうかを確認するため、*to* 不定詞と原形不定詞のうちより acceptable な方を選ばせる調査文を20作り、大学生あるいは大学卒業程度の学歴のある英語を母国語とするインフォーマントを対象に調査を行なった。回答の際、可能な限り選択の理由をも述べさせた。インフォーマントは、イギリス人、アメリカ人、ニュージーランド人それぞれ7人で、年齢や職業に偏りがないように選んだ。

<インフォーマント>

イギリス人

(イ) 女性 21歳 (ロ) 女性 23歳 (ハ) 男性 24歳 (ニ) 男性 30歳 (ホ) 男性 38歳 (ヘ) 男性 52歳 (ト) 女性 55歳

アメリカ人

(チ) 男性 21歳 (リ) 女性 22歳 (ヌ) 男性 23歳 (ル) 男性 26歳 (ヲ) 男性 30歳 (ク) 男性 37歳 (カ) 男性 47歳

ニュージーランド人

(コ) 女性 21歳 (ク) 女性 23歳 (レ) 男性 25歳 (リ) 男性 27歳 (ツ) 女性 30歳 (ネ) 女性 33歳 (ト) 男性 46歳

<調査文>

調査文は、三つのグループからなる。それぞれの調査によって検証する内容は次のごとくである。

[グループ 1] ---①、⑤、⑦、⑩、⑭

主語節の中の *do* item の表現形式が *to* の出沒に影響を与えるのか、つまり大江(1983)

で述べられている主語とのパラレリズムが要因となるのかを検証する。

[グループ 2]---⑩;②、⑥、⑨;⑪、⑫;⑬、⑮

copula の表現形式が to の出沒に影響するかを検証する。Kuno(1977)で示された判断の妥当性をも併せて見る。

[グループ 3]---③、④;⑧、⑯;⑰、⑱;⑲

大江(1983)、江川(1991)で指摘されているように、to不定詞の to は、時間における方向性を示す機能を果たすことが出来る。故に、未来を表す副詞句が主語節内に含まれると、それによって to不定詞の方が誘引されるのかどうかを③④で検証する。⑧⑯⑰⑱⑲では、「主語+伝達動詞」の表現や他の挿入表現が疑似分裂文の中に挿入された場合、あるいは、主語節が非常に長い場合、石橋(1961)で述べられているように統語関係をより明確にするために to不定詞の方が優先的に選ばれるのかどうかを検証する。

- | | |
|--|--|
| <p>① What he has to do is
{A} pay the money.
{B} to pay the money.</p> <p>② What he has to do will be
{A} pay the money.
{B} to pay the money.</p> <p>③ What he has to do in a week is
{A} pay the money.
{B} to pay the money.</p> <p>④ What he has to do in a week will be
{A} pay the money.
{B} to pay the money.</p> <p>⑤ What he can do is
{A} pay the money.
{B} to pay the money.</p> <p>⑥ What he can do will be
{A} pay the money.
{B} to pay the money.</p> <p>⑦ What he will do is
{A} pay the money.
{B} to pay the money.</p> <p>⑧ "What you have to do," he said to Mary, "is
{A} pay the money."
{B} to pay the money."</p> <p>⑨ What he will do will be
{A} pay the money.
{B} to pay the money.</p> <p>⑩ What he does is
{A} pay the money.
{B} to pay the money.</p> <p>⑪ What he has to do would be
{A} pay the money.
{B} to pay the money.</p> | <p>⑫ What he will do would be
{A} pay the money.
{B} to pay the money.</p> <p>⑬ What he had to do has been
{A} pay the money.
{B} to pay the money.</p> <p>⑭ What he has always liked to do is
{A} pay the money.
{B} to pay the money.</p> <p>⑮ What he has always liked to do has been
{A} pay the money.
{B} to pay the money.</p> <p>⑯ What they have to do with the problem of air
pollution in advanced industrial countries is
{A} stop the factories.
{B} to stop the factories.</p> <p>⑰ What he has to do is first of all
{A} pay the money.
{B} to pay the money.</p> <p>⑱ What he has to do is...how shall I say...
{A} pay the money.
{B} to pay the money.</p> <p>⑲ "What you have to do," he said to Mary when
he happened to meet her at the main gate of
the school, "is
{A} pay the money."
{B} to pay the money."</p> <p>⑳ What he had to do was
{A} pay the money.
{B} to pay the money.</p> |
|--|--|

表 2

	(イ)	(ロ)	(ハ)	(ニ)	(ホ)	(ヘ)	(ト)	(チ)	(リ)	(ヌ)	(ル)	(ヲ)	(ク)	(カ)	(コ)	(ケ)	(レ)	(リ)	(ヲ)	(ネ)	(ナ)
①	A	B	A	AB	AB	B	B	A	B	A	A	A	A	A	A	A	A	A	A	A	A
②	B	B	B	B	B	B	A	B	A	B	B	B	B	B	B	B	B	B	B	B	B
③	B	B	A	AB	AB	B	A	A	A	A	A	A	B	AB	A	A	B	A	A	B	A
④	B	B	B	B	B	B	B	B	B	B	B	B	B	B	B	B	B	B	B	B	B
⑤	A	A	A	B	A	A	A	A	A	A	A	A	A	A	B	A	A	A	A	A	B
⑥	A	A	B	B	B	A	AB	B	B	B	B	B	B	B	B	B	B	B	B	B	A
⑦	A	A	A	A	A	A	A	A	A	A	A	A	A	A	A	A	A	A	A	A	A
⑧	A	A	A	B	B	A	B	B	B	B	A	A	AB	AB	A	A	B	A	B	B	A
⑨	A	A	B	B	B	A	A	B	A	B	B	B	B	B	B	B	B	B	B	B	B
⑩	A	A	A	A	A	A	A	A	A	A	A	A	A	A	A	A	A	A	A	A	A
⑪	B	B	B	B	B	B	A	B	B	B	B	B	B	B	B	A	B	B	B	B	B
⑫	A	A	B	B	B	A	A	B	B	B	B	B	B	B	B	B	B	B	B	A	B
⑬	B	B	B	B	B	B	B	B	A	B	B	B	B	B	B	B	A	B	B	B	B
⑭	A	B	A	B	B	B	B	B	B	A	A	A	A	A	A	A	A	B	A	A	A
⑮	B	B	B	B	B	B	B	B	B	B	B	B	B	B	B	B	B	B	B	B	B
⑯	B	B	B	B	B	B	B	B	A	A	A	A	B	AB	B	B	B	B	B	B	A
⑰	A	B	A	A	B	B	A	A	A	A	A	A	A	B	A	A	A	A	A	A	B
⑱	A	A	A	A	A	A	A	A	A	A	A	A	AB	AB	A	A	A	A	A	A	A
⑲	A	A	A	A	A	A	A	A	B	A	A	A	A	B	A	A	B	B	A	A	A
⑳	A	B	A	A	B	B	A	A	B	A	A	A	A	A	B	A	B	B	A	A	A

(表中のAは原形不定詞、Bはto不定詞、ABは両方とも可であることを示す。)

<結果と考察>

表2の結果に基づき以下に考察する。(ここでは、伴リス、アメリカ、ニュージーランド人を英人、米、新で対。)
[グループ1]

①の調査文では、英人と他の国民との間に判断の食違いを見せている。英人はB)の方を *rhythmical* と感じて選ぶ者が多いのに、米人と新人の場合、A)の原形不定詞の方が簡潔かつ *rhythmical* と感じる者が殆どである。ところが、⑤⑦⑩の場合、英人も含めA)を殆どの者が選んでいる。⑩が英、米、新人とも100% A)を選んでいることを考えると、大江(1983)で述べられているように主語節内の *do* が原形不定詞なのでその平行性からA)が選ばれているのではなく、これらの場合、原形不定詞の方が *rhythmical* と英人にも感じられるからであろう。⑭の場合は他の調査文に比べB)を選択する比率が高い。これは、B)を選んだインフォーマントが指摘するように、主語節内の状態の継続を表す現在完了形と時間的方向性を表す *to* を伴った不定詞がより適合すると、特に英人に感じられるからであろう。
[グループ2]

⑳のように *copula* が過去時制の場合、Kuno(1977)ではB)の *to* 不定詞は *ungrammatical* という判断であるが、調査の結果では、英人の場合原形不定詞よりも多く、新人の場合①の調査文とは違い3人がB)を選んでいる。前掲(4)①と同じタイプの文について、Culicover(1982²)、Leech(1989)は *to* 不定詞、原形不定詞のどちらも可という判断を下していることを考え合わせるなら、Kunoの判断には修正が必要である。³⁾ ②⑥⑨のように *will be* が、又、⑪⑫のように *would be* が *copula* の場合、米人と新人はB)を選ぶ者が圧倒的に多い。このように、*be* の後に *to* 不定詞がよく出現することはKunoによって既に指摘されているが、*will be*、*would be* の果たす意味機能が、時間における方向性を示すことの出来る *to* 不定詞を誘引すると考えられる。更に、*be* の後に原形不定詞がくると、音声的、統語的違和感をインフォーマントに与えるため、*to* 不定詞の方が選ばれるとも考えられる。これらの理由は、⑬⑮の *has been* の場合にも当てはまると言える。Kunoは *obligatorily* に *to* 不定詞をとると述べているが、調査でもほぼ同じ結果である。

[グループ3]

③に比べ④は、英人、米人、新人とも100% B)を選んでいる。これは、主として *copula* が *is* から *will be* に変わったことによると考えられる。だが、①と③及び②と④の結果を比較することによって、未来を表す副詞句の挿入に影響されて *to* 不定詞を選ぶ者もいることがわかる。⑧⑱の場合、石橋_三(1961)で述べられているように、主語と補語の位置が離れていることが *to* 不定詞を誘引するとすれば、⑱のB)を選ぶ比率は⑧のB)を選ぶ比率よりも高くなるはずであるが、結果は逆である。調査文のように「主語＋伝達動詞」の表現が疑似分裂文に挿入された場合、それが比較的短いと、その前後の統語関係はその話し手あるいは書き手の意識の中に強く残るが、長くなればなるほど前後一つであるという統語意識が薄らいでいくと考えられる。それ故、⑧のような場合は、文法的に整った形である *to* 不定詞を選んで統語関係を補強せんとする意識がまだ働く。ところが、⑱の場合は非常に長いので、そのような統語意識が殆どなくなり、補語の位置にある不定詞は、山川(1963)、安藤(1969)で指摘されているように、主語節内の動詞 *do* と心理的に同格であるという意識を与え、その結果、原形不定詞が多く選ばれると解釈できる。⑰のような挿入表現の場合、⑱の場合のように主語節の *do* と同格であるという意識を働かせるようである。⑱の場合

は、特にその表す意味や表現形式が⑰の場合以上に統語的断絶感を与えるため、どの国民にも同格意識が強く働いて、高い率でA)が選ばれていると考えられる。⑱のように主語節が非常に長い場合は、統語関係をできる限り明確にせんとする意識が働いて、B)の方が多く選ばれていると判断できる。尚、今回の調査では、安藤(1969)で述べられているto不定詞、原形不定詞それぞれの表す意味的相違については確認できなかった。

以上、実例調査とインフォーマント調査を通じて to の出沒を支配する要因のいくつかを実証した。このように、疑似分裂文におけるto不定詞と原形不定詞の選択は、optionalと単純に片付けられるものではなく、さまざまな外的、内的要因の影響を受けてなされていると言える。

Notes

- * 本稿は、溝端⁸⁾、「疑似分裂文における不定詞」、「研究紀要」、第26号(奈良高専 1990)及び平成4年10月18日に日本英語コミュニケーション学会第1回年次大会で、「疑似分裂文における不定詞について」という表題で筆者が発表したものをさらに発展させまとめたものである。
- 1) 松浪⁹⁾、『大修館英語学事典』(大修館 1983)、p.633 参照。
 - 2) この用語は、Quirk(1985:1388)からのもので、主語節の中で代用動詞として用いられる do, does, did, doing, done を指す。
 - 3) Culicover(1982:144)では(i)、Leech(1989:206)では(ii)の例が挙げられて、to不定詞と原形不定詞の両方が可能であるという判断が示されている。
(i) What John did was (to) leave the door open.
(ii) What she did was to give all her money away.
What she did was give all her money away.

References

- 1) 安藤貞雄 (1969). 『英語語法研究』 研究社.
- 2) Culicover, P.W. (1982³). *Syntax*. New York: Academic Press.
- 3) Declerck, R. (1991). *A Comprehensive Descriptive Grammar of English*. Tokyo: Kaitakusha.
- 4) 江川泰一郎 (1991³). 『英文法解説』 金子書房.
- 5) 石橋孝太郎 (編) (1961). 『不定詞・動名詞』(クエストボックスシリーズ第7巻) 大修館.
- 6) Jespersen, O. (1940). *A Modern English Grammar on Historical Principles*, Part V. London & Copenhagen: Munksgaard and Allen & Unwin.
- 7) Kuno, S. (1977). "WH-CLEFT AND IT-CLEFT SENTENCES," *Studies in English Linguistics* 5: 88-117.
- 8) Leech, G. (1989). *An A-Z of English Grammar and Usage*. London: Edward Arnold.
- 9) 松浪有 (編) (1983). 『大修館英語学事典』 大修館.
- 10) 大江三郎 (1983). 『動詞 (II)』(講座・学校英文法の基礎 第5巻) 研究社.
- 11) Quirk, R. et al. (1985). *A Comprehensive Grammar of the English Language*. London: Longman.
- 12) Swan, M. (1980). *Practical English Usage*. Oxford: Oxford University Press.
- 13) Visser, F.Th. (1972). *An Historical Syntax of the English Language*, Part II. Leiden: E. J. Brill.
- 14) 山川喜久男 (1963). 『英語における準動詞の発達と特質』 松柏社.
- 15) 安井 稔 (1978). 『新しい聞き手の文法』 大修館.